同一演出作品による巡回公演の舞台・楽屋の使われ方

—多目的ホールにおけるオペラ上演の事例研究—

USE OF STAGES AND DRESS ROOMS FOR SAME PRODUCTION
BY A TOURING OPERA COMPANY

Case study of opera performance at multipurpose hall

勝又英明*, 田邊健雄**

Hideaki KATSUMATA and Takeo TANABE

This paper describes differences of the use of stages and dressing rooms for the single and same production by a touring opera company in three different multipurpose halls. Our purpose is to get the basic data about the floor planning of stages and dressing rooms by comparing them each other. We measured plot conditions of sceneries on stages and equipments in dressing rooms. On stages, we could find differences in each hall in schedules of carrying in and out, place of set and company's own hand equipment. On dressing rooms, we could find necessity of attention to size, specification and circulation with another rooms. And waiting space around doorway to a stage should be highly effective.

Keywords: theatre, multipurpose hall, opera production, stage, dressing room

劇場, 多目的ホール, オペラ上演, 舞台, 楽屋

1. 研究目的

本報は、複数の異なった多目的ホールでの同一演出作品のオペラの上演をめぐる、各ホール施設の使われ方の差異を調査し、現時点におけるオペラ上演による舞台の使われ方、舞台、楽屋空間の規模について考察を行ったものである。

調査は、最低限、中規模のオペラが上演可能であることを、多目的ホールの必要条件とするという立場から、大別して舞台を中心とするもの、楽屋を中心とするものとに分けて行った。そして劇場の舞台・楽屋に最低限求められている仕様を、昭和54年に建築学会劇場小委員会が提案した舞台規模推奨値¹⁾、楽屋規模推奨値²⁾との比較等により明らかにし、多目的ホール、単数または複数の主要演目にある程度専門化されたホールの新設時及び改修時の舞台、楽屋回りの平面計画上の基礎資料の一助とすることを目的とするものである。既往の研究では、同一ホールにおける複数演目について、調査を行ったもの

表1 「カルメン」公演日程予定(二期会資料による)

月	日	曜	公演地	申込み	G	P	開	演
9	20	火	京都・八幡市文化センター	13:30~				
	21	水	"			17:30~		
	22	水	"			13:00~	18:15~	
	23	木	兵庫・赤穂市文化会館	10:00~			18:00~	
	24	金	移動日					
	25	土	大分・大分県立芸術会館	9:00~			18:00~	
	26	日	移動日					
	27	月	和歌山・紀南文化会館	9:00~			18:30~	
	28	火	帰京					

表2 公演の概要

演目	カルメン	演出	栗山昌良	監督	菅原多敏弘
主催	文化庁他	装置	堀尾幸男	出演	二期会他
制作	二期会	衣装	岩井克己	合唱	二期会合唱団
指揮	佐藤功太郎	照明	服部基	舞臺	舞臺フォーカス・モーター・音響

表3 各ホールの建築概要(各ホールのパンフレットによる)

住 所	八幡市文化センター	赤穂市文化会館	紀南文化会館
開館年月日	京都府八幡市 昭和58年	兵庫県赤穂市 平成4年	和歌山県田辺市 昭和59年
敷地面積	約9,000 m ²	18,838.44 m ²	17,660 m ²
建築面積	4,814.28 m ²	5,695.27 m ²	4,097.70 m ²
設計者	山下設計	日建設計	内藤建築事務所
客席数	1,220 席	1,168 席	1,224 席
(オーケストラピット除く)	(1,136 席)	(1,066 席)	(1,110 席)

のはあるが、同一演出作品を複数の多目的ホールについて調査を行ったものはほとんどない。

本論文は、参考文献3)で報告したものを修正・加筆したものである。

* 武蔵工業大学工学部建築学科 助手・博士(工学)

** 武蔵工業大学工学部建築学科 助教授・工修

Research Assoc., Dept. of Architecture, Faculty of Engineering, Musashi Institute of Technology, Dr. Eng.

Assoc. Prof., Dept. of Architecture, Faculty of Engineering, Musashi Institute of Technology, M. Eng.

2. 研究方法

研究調査対象は、平成5年9月22日から10月27日までの平成5年度移動芸術祭巡回公演秋季公演、二期会主催のオペラ「カルメン」(全4幕)である(表1、2)。公演地は、八幡市文化センター(以下『八幡』)、赤穂市文化会館(以下『赤穂』)、紀南文化会館(以下『紀南』)である。オペラを調査研究対象にした理由は、オペラは音楽、芝居等の総合芸術であり、バレエ、オーケストラ等数ある演目の中でも最も公演参加者数³⁾が多く施設を広範囲に使用するからである。調査会場⁴⁾は、いずれも1,200席前後(オーケストラピット使用時で1,100席前後)の多目的ホールである(表3)。

舞台の調査は舞台装置を中心とし、各装置の水平投影上の寸法を、装置の書き込まれた仕込図を元に、各幕毎の装置の配置状況を実測、また実測が不可能な場合には仕込図の寸法を利用することにより行った。実測は本番時ではなく、ゲネラルプローブ「Generalprobe(独)」⁵⁾(以下GP)時、明かり合わせ⁶⁾、場当たり⁷⁾直前にを行い、本番時とGP時直前で備品・装置配置が実測と異なる場合は、本番時の備品・装置配置を優先採用した。但し、本舞台では調査員が立ち入ることができないため、各幕の仕込図を利用し、また、側舞台では舞台の端から2方向の寸法を取り、位置を設定している。仕込図と実態との差異については、上記の理由により目測による確認を行った。

楽屋の調査は、主催者持ち込みの備品・装置又は主催者が使用した館常備品の楽屋での配置を実測することにより行った。

3. 舞台の調査結果

3.1 舞台規模と推奨値との比較

建築学会の推奨値と各ホールの舞台規模を比較(表4)すると、各ホール共、開館年から逆算して設計年を推測すると、学会の推奨値を参考にできるにもかかわらず、満たしていない部分が多い。プロセニアムの幅は、学会

表4 各ホールの舞台規模と舞台規模推奨値との比較

	舞台規模推奨値(S54)	八幡市文化センター	赤穂市文化会館	紀南文化会館
プロセニアム 幅(PW)	11~15m	20.0m	16.0m	17.5m
高さ(PH)	6~8m	9.0m	19.0m	8.0m
主舞台 幅	PW+12m	20.0m	17.7m	17.4m
奥行	1.2PW ~1.5PW	16.2m	19.0m	15.0m
上手側舞台 幅	PW+8m	7.5m	7.7m	8.2m
奥行	主舞台奥行-4m	14.2m	19.0m	15.0m
下手側舞台 幅	PW+8m	12.2m	6.5m	9.4m
奥行	主舞台奥行-4m	14.7m	19.5m	15.0m

表5 舞台規模推奨値と推測値の比較

	舞台規模推奨値(S54)	今回の推測値
プロセニアム 幅(PW)	15m	15m
高さ(PH)	8m	8m
主舞台 幅	27m	18m
奥行	18~22.5m	16m
側舞台 幅	23m	12m
奥行	14~18.5m	15m

の推奨値が主にオペラ、バレエを前提としており、各館とも広めになっている。プロセニアムの高さは、八幡、紀南ではほぼ満たしているが、赤穂はコンサートを主目的とした多目的ホールであるため、倍以上の高さとなっている。主舞台、側舞台の比較は各ホールのプロセニアム幅が基準となる。主舞台幅、奥行きは、基準値のプロセニアム幅が広めであるため、赤穂を除いて足りない。上手側舞台幅は、全く満たしていない。しかし奥行きは、各ホール共、満たしている。下手側舞台幅は、八幡、紀南では、満たしていないことは同様だが、上手よりは大きい。しかし、赤穂ではさらに小さくなっている。

今回の公演のデータを元に、舞台の適性規模を推測すると、表5のようになる。調査した各ホールが、推奨値を満たしていないことと、プロダクション自体が、現状認識の上に立ったプロダクション規模を設定しているので、今回の推測値が、推奨値よりも下回った規模となっている。

3.2 装置位置、吊物位置の変化(図1)

劇幕の位置を基準として、装置位置、吊物位置を示しているのが図1である。図1の凡例の○の位置を、図中に示しており、八幡と紀南の装置位置の比較をしている。(赤穂は、仕込み図が入手できなかったため、比較できなかった。)

バトンに吊した天蓋幕、袖幕の位置が、2館で1~2

図1 各ホールの装置位置、吊物位置の変化

m違うため、背景壁2小階段(4幕)は、2館で差が出ている。他にもバトンの位置(吊物位置)により、装置位置の影響を受けているが、もっとも奥にあるバック幕(約-11m)の位置が、ほぼ2館共同である。吊物は背景壁1、2、大階段、小階段により、見切り等調整され、主舞台中の舞台装置の動きは少ない。図1凡例中の寸法は装置の外形寸法である。

3.3 主要装置の幕毎の移動(図2-1、2)

各ホールの主要装置の各幕毎の配置について示したものである。線の軌跡が、各幕毎の装置の移動である。又網点で、備品の置かれた位置等を示している。

3館とも本番時、主舞台上での配置には目測による差異はなく、本調査では主舞台上で不使用時の装置の処理状況が主な比較の対象となるが、各ホールとも不使用時の装置置場には相異があった。⁸⁾以下ホール毎に変化のあった装置について述べる。⁹⁾

(1) 小階段(第3幕では不使用)

八幡、赤穂では、ほぼ同じ位置(上手側舞台に引き込まれた位置)であるが、紀南では上手壁ぎわに、壁と平行に置かれている。これは上手が狭いためである。

(2) 背景1、2、3(すべて第3、4幕では不使用)

背景1、2は、3館とも基本的に不変であった。背景3のみ、八幡、赤穂では同じ位置だが、紀南では下手側舞台奥壁に押し付けられている。本来は紀南のように、邪魔にならない舞台奥に置く方が、上手側舞台空間に余裕ができるため良いと思われるが、八幡では上手が狭いことと、搬出入口が上手にあり舞台中央に寄っているため、その位置に置かざるを得なかった。赤穂では上手奥は館の備品置場にあたるためスペースに余裕がなく、また舞台出入口(楽屋部分から、舞台への出入口)が舞台の中央寄りであるため置き場所がなかった。紀南ではスペースがなく、3幕で使用する吊り木を4幕では搬出入口付近に置くため、背景3は上手に置くことができず下手に置かれていた。

3館とも、出番の終わった装置は搬出入口のある上手方向に集中し、そのため、搬出入口付近は装置を置くためのスペースが必要だった。

(3) カーテン(第2幕でのみ使用)

2幕のカーテンは、立て掛けられるスペース(壁)が必要だった。赤穂、紀南では、壁部分があり問題はなかったが、八幡では上手に綱元があるため壁面が少なく、1幕は綱元のフェンスに立て掛けられていたが(写真)3、4幕では上手側のポータルタワーに立て掛けていた今回の舞台装置には、立て掛けなければならない物が多いため壁面が必要であった。特に綱元がくる場合は、壁面が少なくなるため、計画し留意が必要である。

(4) 吊り木(第3幕でのみ使用)

写真 八幡市文化センターの上手側舞台の装置の状況

長手の物であり立て掛ける必要のある装置である。八幡では上手に余裕がないため、4幕の時点で再び下手に持ってきた。赤穂では上手奥に置くことができ、紀南では搬出入スペースが広いと、出番が終わると上手から搬出入スペースに持っていくことができた。

3.4 各ホールの配置等の比較(図2-1、2)

(1) 仕込み時間

仕込みに要した時間¹⁰⁾は、八幡2時間30分、赤穂1時間45分、紀南2時間であった。八幡では仕込の当日には、GP、本番、ともにないこと、移動公演の初公演地であることから、装置の点検等にも充分な時間をかけていた。紀南は搬出入車¹¹⁾が1台づつしかつけられなかったため多少時間がかかった。

(2) 搬出時間

3館とも搬出時間¹²⁾の差は5分程度である。紀南では、搬入車は2階の舞台レベルに1台しかつけられなかったため、5分程多くかかっている。ただし、舞台下の1階の道路レベルに大楽屋ゾーンがあり、そこから直接搬出することができたため、結果的に他館と大きな違いはなかったと思われる。

(3) 舞台の仕込み状況(上手側舞台)

上手側舞台幅は、3館共ほぼ同一であるが、使われ方に差が出ている。上手側舞台の余裕は、赤穂、八幡、紀南の順である。赤穂は、奥行きが19mと、他の2館の14~15mよりもとれていることと、舞台に連続した搬出入スペースを持っていたのでかなりの余裕が生まれていた。八幡は、幅、奥行き共、紀南と変わらないが、主舞台幅が、紀南よりも2.8m広いと余裕が出ている。紀南は3館の中で最も狭く、装置を重ねて置く等その処理に苦勞が感じられたが、上手側舞台奥(楽屋の並び)に搬出入スペースがあり、それを利用することにより演出上特に問題は生じなかった。また、紀南は上手側舞台から脇花道出口に向かう廊下が狭かったため、装置に圧迫される形となり、その入口部は特に通行しにくかった。

図 2 - 1 各ホールの舞台装置配置

凡例

A: 主舞台	E: 客席	I: 側元
B: 上手側舞台	F: 演出入口	J: 脇花道
C: 下手側舞台	G: 上手舞台出入口	
D: オーケストラピット	H: 下手舞台出入口	

凡例

——— : 小階段	 : 2幕カーテン	■ : 持ち込み照明設備
——— : 音読1	 : 2幕テーブルセット	■ : ネール製品
——— : 音読2	 : 3幕品々木	■ : コーラス位置
——— : 音読3		

図2-2 各ホールの舞台装置配置

0 5 10 30

(4) 舞台の仕込み状況(下手側舞台)

八幡は3館の中で最も広く、特に問題はなかった。紀南も舞台への出入口が狭い以外は、特に問題はなかった。赤穂は3館の中で最も狭く、舞台裏側の楽屋廊下から舞台への出入口が舞台中央に寄っているため、演出上舞台裏を走り抜ける一部の役者達には支障があった。また第3幕では、上手側舞台でコーラス(合唱女声18人、合唱男声16人(子供合唱団はなし))が行われていたが、赤穂の下手側舞台は他の2館よりも狭いため、コーラスの場所が密集していた。¹³⁾ 舞台の奥行きについては、今回の演出が最も浅い奥行きに合わせたものだったため、赤穂のように奥行きのあるホールが、演出上生かされたとはいえなかった。ただし舞台の広さが、演出上ではなく、搬出入時の作業空間として利用されていた。

(5) 搬出入口位置

赤穂では上手奥にある。ただし、袖壁があるため柱間一杯に搬出入スペースがとれず搬出時に邪魔となった。紀南では、十分な搬出入スペースがあり、使用済み装置を運び出すことができたため、上手に余裕ができた。側舞台が十分に広くない場合、搬出入スペースを広く取るとは有効である。八幡では他館にくらべて搬出入スペースがほとんどなかった。しかし舞台と搬出入スペースが直結しており、荷捌き車両を2台つけることができるため、荷を早く搬出入することができた。また、客席と道路が同一レベルにあり、客席脇の非常口から、側面構内道路上の運搬トラックに楽器の搬出を行っていた。すなわち、装置の搬出と併行作業として行われ、結果的に搬出時間は他館とほぼ同一だった。

(6) 舞台出入口位置

3館とも舞台の両側にある。赤穂は舞台出入口が舞台中心に寄っていたため、動線に一部(裏方が急いで往来する時等)支障があったが、しかし演出上特に問題とはならなかった。紀南は、上手には舞台出入口と並んで搬出入スペースからの大きな開口があり、出入りは楽だったが、下手は開口が狭く出入りが苦しかった。舞台出入口位置と装置の置場の関係については考慮する必要がある。

(7) 綱元位置

八幡では綱元が上手にあったが、今回の演出では上手に装置がおかれるケースが多く、また搬出時に装置搬出順序の関係上、搬出入口近くに装置がおかれるケースもあった。綱元部分には立て掛ける必要のある装置が置くことができない部分もあり、置場に苦労していた。¹⁴⁾

(8) 空箱の処理(主催者側)

持ち込み照明器具の空き箱の処理について、八幡では上手側舞台と客席廊下との間に置かれていた。赤穂では上手壁部分、及び廊下部分に置かれていた。紀南でも、上手側舞台と客席廊下との間に置かれていたが、非常に狭くまた暗かったので、人一人通るのがやっとだった。

上手のこの部分は、脇花道を利用する出演者の通行があるため、空箱の置場専用として利用することはできなかった。今後は持ち込み照明の空箱の処理のための場所を確保しておく必要がある。廊下等に置く場合は、廊下を広めに設定する必要がある、その広さとして、壁際に箱を置き、かつ人がすれ違える程度は必要である。

(9) 撤去照明器具の配置(館側)

ホール常設の照明器具の中の一部が、主催者側による持ち込みの照明器具設置のため一時撤去された。その撤去照明は、八幡では下手倉庫に収納することにより、また赤穂では上手倉庫に収納することにより、舞台上への支障はなかった。紀南では上手倉庫に収納したが入り切らなかったため階段室等にも溢れていた。近年、移動公演の場合には、仕込みの効率化のため照明器具を主催者側で持ち歩き、備え付けの照明器具を一時撤去することが多くっており、撤去照明器具の処理、置場所についても考慮の必要がある。

4. 楽屋の調査結果

今回調査したホールはすべて舞台回りに楽屋が配置されており、平面的に類似したタイプである。本公演は規模としては大きい方に属するため、3館共、本来の楽屋のみでは足りず、各施設内の本来ホール付属ではないが楽屋として転用可能な他の諸室をも利用していた。

4.1 楽屋規模と推奨値との比較

建築学会の推奨値と各ホールの楽屋規模を比較したのが表6である。楽屋定員は赤穂以外ほぼ満たしているが、楽屋総面積では、八幡、赤穂が満たしていない。表6の下欄に、今回の公演の楽屋として利用した部屋の総面積を示したが、600㎡程度が必要であることがわかる。表7では楽屋面積と室数の関係を示したが、表8と合わせてみると、八幡、紀南では、個室、中楽屋の室数がたりない。個室楽屋系は本公演の場合、4室は必要である。

表6 各ホールの楽屋規模と楽屋規模推奨値との比較 1

	楽屋規模推奨値 (S54)	八幡市文化センター	赤穂市文化会館	紀南文化会館
客席数 (オーケストラピット使用時)	1,000±α席	1,220席 (1,136席)	1,168席 (1,066席)	1,224席 (1,110席)
楽屋定員	60~100人	70人	46人	66人
楽屋総面積	180~400㎡	115㎡	147㎡	206㎡
本公演で楽屋として利用した 部屋の総面積		643㎡	596㎡	588㎡

表7 各ホールの楽屋規模と楽屋規模推奨値との比較 2

	楽屋規模推奨値 (S54)		八幡市文化センター		赤穂市文化会館		紀南文化会館	
	楽屋面積	室数	楽屋面積	室数	楽屋面積	室数	楽屋面積	室数
楽屋規模	10㎡	1	14㎡	2	25㎡	1	12㎡	1
					16㎡	1		
	15㎡	2			19㎡	1	20㎡	1
					37㎡	1		
	60㎡	2	29㎡	3	50㎡	1	58㎡	3
楽屋総面積	160㎡		115㎡		147㎡		206㎡	

注：楽屋規模は個室楽屋、中楽屋、大楽屋の順

4.2 各ホールの楽屋割について（表8）

(1) 全体的な配置

紀南に比べ、八幡、赤穂では、出演者群にはば楽屋が割り当てられていた。特に赤穂では大ホールと小ホールの楽屋を1つのシステムとして使えるように、更に小ホールの舞台は防火戸で客席と分離され、大ホールの楽屋として使われるようになっていた。¹⁵⁾

(2) 舞踏

出演直前の練習のため、練習スペースや鏡が必要であるが、八幡、赤穂では廊下にある鏡の前のスペースが練習には不十分な広さであったため不便であった。紀南では舞台上階の楽屋ゾーンに比較的広いスペースがあり、そこで練習できた。本来ならば、舞踏の出演者たちは鏡が備えられたリハーサル室で着替えや練習をするべきであるが、今回の公演は出演者の種類と数が多く、舞踊出演者専用リハーサル室を割り当てる余裕がなかった。舞踏出演者は助演としても出演しており、楽屋の出入りが多かった。

(3) 衣裳・床山・スタッフ

衣裳・床山・スタッフは、赤穂及び紀南では同室であった。八幡では、スタッフは2階の練習室3を割り当てられていたが、この部屋は主要楽屋、舞台から距離があるため、ただ荷物置場のみに使われ、スタッフは通常時ほとんど楽屋ゾーンの廊下におり、食事も廊下でとるといった状態であった。赤穂、紀南では食事はそれぞれ割り当てられた楽屋でとっていた。特に赤穂では、昼食時楽屋廊下にはほとんどスタッフの姿は見られなかった。尚、衣裳室は、今回の公演の行われた各ホールとも、専用スペースはなく、どのホールでも舞台裏主要楽屋ゾーンの大楽屋が利用され、更にこれに隣接した近辺に洗濯機置場が設けられていた。¹⁶⁾ 赤穂には専用の洗濯室があり、八幡、紀南では専用のスペースはなく、八幡では女子トイレに、紀南ではシャワー室に洗濯機が置かれていた。移動公演の受入れを前提とするならば、衣裳室に近い位置に洗濯機を置けるようにすると共に、洗濯物干

し場を設置する必要がある。¹⁷⁾

4.3 楽屋動線（図3）

今回の調査で、特に動線上問題があると思われたのは、舞台裏楽屋ゾーン以外の部分に割り当てられた、オーケストラや合唱男声、助演、舞踏のための控室であった。もちろん動線が問題となるのは主に本番時及びその前後である。

(1) オーケストラ動線

八幡、赤穂では、オーケストラ控室が大ホールに付属の部屋以外の施設であるため、舞台出入りに際して共用ゾーンを通らざるを得ない状態であった。特に今回赤穂では、たまたま共用ゾーンを中心として市民芸術祭が行われていたため、一般客との若干の混乱が見られた。建築計画的にみて本来ならば、舞台と同レベルの展示室をオーケストラ用控室として転用可能な筈なのだが、先約により既使用中のため利用できなかった。紀南では、オーケストラピットから控室に割り当てられた研修室への動線が舞台経由以外にはなかったため、本番前後は屋外を通過しなければならない状態であった。

(2) 合唱男声・助演・舞踏動線

八幡では、主に舞踏の人達の移動に際して、他出演者用に割り当てられた楽屋であるリハーサル室を通過しなければならなかった。出演者の話では、合唱男声、助演は出演の場面が多く舞台の出入りが多い（もちろん合唱女声も同条件）ので、舞台と同レベルであることが望ましく、また楽屋廊下の途中に階段があると不便であるとの指摘もあった。

4.4 楽屋廊下の使われ方（図4）

本調査では、楽屋廊下の機能について特に注意した。楽屋廊下は、本来の廊下としての機能（各部屋への通行、通過）はもとより、荷物置場、衣裳ケース置場、小道具置場、給茶スペース等として多目的に利用されていた。

楽屋廊下には、場所をとる衣裳ケースや、小道具を入れる木箱、衣裳の段ボール箱が特に多く出ていた。各ホールによって楽屋の規模は相違していたが、廊下に出ている荷物の量はほとんど同じであり、また当然、楽屋に持ち込まれる荷物もほぼ同量であった。つまり本調査の結果によれば、楽屋廊下に置かれるものは、楽屋規模や配置に関係なくほぼ一定であったといえる。

楽屋廊下の広さとして、参考文献 5) によれば、 $2.1\text{ m} + a$ 、参考文献 6), 7) によれば、有効 2.5 m 以上が推奨されている。八幡 2.1 m 、赤穂 2.2 m 、紀南 2.4 m

（図5）であり、観察の結果によれば 2.5 m 以上は妥当な数値といえる。 2.1 m では、作業や演出に支障がでる。また八幡、赤穂では柱間の凹壁面が有効に利用されており、廊下に余裕のない時の一つの対処法がみられた。

表8 各ホールの楽屋割 (面積㎡)

部屋 No.	出演者	人数 (人)	八幡市文化センター		赤穂市文化会館		紀南文化会館	
			室名	面積	室名	面積	室名	面積
1-1	カルソノ・ミカエラ	2	個室1	14	楽屋1	25	楽屋4	20
1-2	フラスキータ・ノルマデス	2	個室2	14	楽屋7	14		
2-1	ドンキエ・エスカリョ	2	楽屋1	29	楽屋2	16		
2-2	男声ソロ	4			楽屋5	50	楽屋2	58
2-3	舞踏男性	1	練習室1	32				
3	マエストロ	1	控室	10	楽屋3	19	楽屋5	12
4-1	合唱女声	18	楽屋2	29	楽屋4	37	楽屋1	58
4-2	舞踏女性	6	練習室2	32	練習室2	48		
5-1	合唱男声	16			楽屋6	38		
5-2	助演	4	リハーサル室	145	楽屋8	14	リハーサル室	117
5-3	当地出演男性	10			小ホール舞台	205		
6	子供合唱団	1	会議室1,2	92	練習室1	57	音楽練習室	67
7-1	衣裳・床山	5	楽屋3	29	楽屋5	50	楽屋3	58
7-2	スタッフ	19	練習室3	47				
8	オーケストラ	58	会議室・研修室	161	総務室・和室	58	研修室123	180
9	主催者	2	主催者事務室	9	主催者事務室	13	主催者事務室	18
10	現地手伝い	10	-	-	-	-	-	-

図3 各ホールの楽屋配置と出演者動線

図 4 各ホール主要楽屋の道具配置

図 5 各ホールの廊下幅の詳細

5. まとめ

以下に本調査により明らかになった諸点を列記する。

①今回の公演では装置の未使用時に立て掛けるものが多かった。舞台スペースに余裕のない場合、壁面を利用して装置を立て掛けられると有効である。立て掛けるような壁面を側舞台に設けると、装置の置場が増え、側舞台の有効な利用が可能となる。

②今回の公演は移動公演であるため、搬出入を考慮して利用の終わった装置は搬出入口に集中する傾向があった舞台上に使用済みの装置を置くスペースがない場合、舞台に連続した部屋、スペースとして装置置場を用意するか、あるいは荷捌き車両を舞台に直達できるようにすれば、それら进行处理することができ、舞台の有効スペースが広がる。

③楽屋から舞台への出入口と搬出入口が同一の場合、装置の搬出と楽屋出入り動線が交錯して不都合が生ずるため、なるべく分けるようにする必要がある。

④主催者側の持込み照明用の空箱と館側の撤去照明の収納に留意する必要がある。これらを収納する倉庫やスペースについて考慮する必要があるが、例えばスペースとしては通常より広い廊下スペースの利用が考えられる。

⑤今回の公演では、楽屋規模は学会の推奨値では足りなく、同一施設内に複合して設けられる他施設の利用が、公演の前提となる。当該ホール以外の楽屋や諸室を利用したとして、楽屋相当部分の総面積合計が 600㎡程度あれば、今回の公演は可能であることがわかった。

⑥今回の公演では、楽屋廊下に置かれるものは楽屋規模や配置に関係なく各ホールではほぼ一定であった。推奨されている、有効 2.5m は、楽屋廊下に物を置くことを前提としても有効であることがわかった。特に舞台出入口付近は、小道具置場など演出にとって重要なスペースがあるので、上記の廊下幅を確保するのはもちろん舞台出入口付近に出持ち用の専用スペースを設ける必要がある

謝 辞

本調査にあたり、全面的にご協力をいただいた二期会ザ・スタッフ及び各館、その他関係各位に対し、ご迷惑をおかけしたおわびと共に厚く御礼申し上げます。なお調査には田邊研究室院生 猪野明洋、調査当時の卒論生 押久保伸一、土田亨、中田尚子、昇奈加子、横山美砂子各君、調査のまとめには、本学研究補助員 入江恵子君他の協力を得ました。感謝の意を表します。

注

1) 参考文献 4)による。

- 2) 参考文献 5)による。
- 3) 参考文献 7) P.43 表4「専門家団体の大規模編成例」による。
- 4) 大分県立芸術会館は都合により除外した。
- 5) 英語の「reheasal」は下稽古を意味しており、ゲネラルブローベとは同義ではない。ゲネラルブローベとは最終的な舞台稽古。総稽古のことで、舞台の総仕上げを意味している。これに相当する英語には「dress reheasal」がある。
- 6) G P、本番に先立ち、仕込みの終了した舞台装置に対して照明の調整を行うこと。
- 7) G P、本番に先立ち、仕込みの終了した舞台で出演者の配置の調整を行うこと。
- 8) 各ホールとも、本公演の演出空間として特に問題となることはなかった。
- 9) 舞台装置配置は、八幡での初日前に行われた2回のG Pの際に、場当たりをして決めていた。その他の2館では、移動公演のため時間的な余裕がなく、一回の公演ごとに装置配置の変更ができていない状態であったため、八幡と同じ装置配置で行っていた。細かい装置配置の変更(側舞台の吊り込み位置など)については、八幡での配置と同じ配置になるよう工夫を行っていた。また、厳密な舞台寸法については、本舞台での調査は不可能であったため、仕込み図と実態の差異について目測での確認を行った。
- 10) 搬入口が館の職員により開けられた時間から、仕込み直し・明り合せの時間までである。
- 11) 搬入車は二期会用(大道具、小道具、衣装、かつら等)として11t車用2台、オーケストラ用(楽器等)として4t車1台あり、それぞれの荷物が混載されないよう積み込まれ、別々のスタッフにより荷捌きが行われていた。また、ワゴンに関しては、今回の移動公演では使われていなかった。
- 12) 公演終了時から最後の荷物が積み終わるまでの時間である。
- 13) 図1、2の網点の微妙な大小は、コーラスの分布状態の相違を表している。赤穂の下手舞台の寸法は、他の2館よりも狭く、従ってコーラスが密集し、網点の範囲が小さくなっている。
- 14) 今回の移動公演では、大道具立てを使用していなかった。
- 15) 楽屋廊下から舞台への出入口である。
- 16) 移動公演であるため、一部の衣装(シャツ、スカーフ類)に関しては一回の公演ごとに洗濯をする必要があり、そのために洗濯機が必要となる。
- 17) 実際、赤穂では小ホールの舞台に、紀南では搬入口の外、八幡では楽屋口の裏手に、それぞれ洗濯物が干されていた。

参考文献

- 1) 田邊健雄・勝又英明他：同一演出作品による巡回公演の舞台の使われ方 多目的ホールにおけるオペラ上演の事例研究(その1)，日本建築学会東海支部研究報告集，PP.557～560，1994.2
- 2) 田邊健雄・勝又英明他：同一演出作品による巡回公演の楽屋の使われ方 多目的ホールにおけるオペラ上演の事例研究(その2)，日本建築学会関東支部研究報告集，PP.325～328，1994.3
- 3) 田邊健雄・勝又英明：同一演出作品による巡回公演の舞台・楽屋の使われ方 多目的ホールにおけるオペラ上演の事例研究，日本建築学会第12回地域施設計画研究シンポジウム，1994.7
- 4) 日本建築学会計画委員会劇場小委員会：多目的ホール設計資料(6)，建築雑誌，vol.94，No.1145，PP.60～64，1979.1
- 5) 日本建築学会計画委員会劇場小委員会：多目的ホール舞台設計規準(2)，建築雑誌，vol.185，No.1027，PP.607～609，1970.8
- 6) 彰国社編：建築計画チェックリスト 集会・催し施設，彰国社，1981
- 7) 日本建築学会編：多目的ホールの設計資料，彰国社，1993
- 8) 日本建築学会編：多目的ホール舞台設計資料，彰国社，1981
- 9) 倉橋健・竹内敏晴監修：演劇映画テレビ舞踊オペラ百科，平凡社，1983
- 10) KARIN R. M. BAND-KUZMANY: GLOSSARY OF THE THEATRE, ELSEVIER PUBLISHING COMPANY, 1969

(1994年5月10日原稿受理，1994年10月14日採用決定)